

月例研究会（2004年9月22日）

農民運動指導者の戦中・戦後
—— 三宅正一を事例として

横関 至

報告では、農民運動指導者の戦中・戦後の思想と行動を探る試みの一環として、農民運動指導者、社会大衆党・社会党幹部として戦前・戦時下・戦後を通して指導的立場にいた三宅正一の戦中・戦後の思想と行動を検討した。検討に際しては、日中戦争開戦、人民戦線事件の1937年から敗戦までを戦中（戦時下）とし、戦前・戦中（戦時下）・戦後という三区画を設定した。「戦前と戦後」の対比というだけでは、戦中（戦時下）の時期の独自性が過小評価されてしまうと考えたからである。従来の研究においては、三宅正一の戦時下や敗戦直後の動向などについて十分に検討されてはこなかった。

なお、社会大衆党と農民運動の関係や、戦前農民運動が戦後の社会党幹部の人的供給源となったこと、および戦後の社会党結党過程において杉山元治郎や三宅正一が批判の対象となった理由については、拙稿「日本農民組合の再建と社会党・共産党」上下（『大原社会問題研究所雑誌』514号、2001年9月、516号、2001年11月）、同「大日本農民組合の結成と社会大衆党」（『大原社会問題研究所雑誌』529号、2002年12月）で検討した。

三宅は、戦時下にあつては、総力戦体制構築

のためにこそ農業での改革が必要との論陣を張り、聖戦貫徹議員連盟や新体制促進同志会に参加し新体制運動に積極的に関与していった。三宅は斎藤隆夫除名に批判的態度をとった社会大衆党議員を処分すべきと主張し、自重を求める須永好とは異なる立場をとった。さらに、三宅は農地制度改革同盟の解消を唱え、存続を主張した平野力三や須永好と対立した。そして、三宅は杉山元治郎らとともに岸信介、船田中らと護国同志会を結成したが、平野力三や須永好は参加しなかった。このように、農民組合指導部の主潮流の1つであった杉山元治郎、須永好、三宅正一らの日本労農党系は、戦時下に分化した。須永好は、農地制度改革同盟の存続という点において、それまで運動路線を異にして来た平野力三と協同する立場にたった。

戦後の運動再建時には、三宅は「流血革命」か「民主主義的方途」かという選択肢に直面していることを提起し「民主主義の線」を「必然の方向」とみなす政治家として自己を位置づけた。「流血革命」の方向ではなく産業民主主義、建設的な「社会改革」を提唱することによって、敗戦と占領という新たな事態に対処しようとしていたのである。その際、戦時下において戦争推進をはかったことへの反省はみられなかった。

こうした趣旨の報告に対し、三宅が分析対象に値する人物かどうかという疑問や戦時下の行動の位置付けについての異論が寄せられた。資料の一層の充実が必要との指摘もあった。「平板な実証に陥っている」との批判も、後日承った。

（よこぜき・いたる 法政大学大原社会問題研究所
兼任研究員）